

蒸ノ湯

土砂崩れにも負けず

蒸ノ湯は、自然の奥深くに佇んでいます。八幡平山腹の標高 1,100 メートル地点にある小さな丘に立つこの宿は、宿を取り巻く噴気にちなんで名付けられました。蒸ノ湯は、日本の初代将軍徳川家康の死から 5 年後の 1621 年に創業しました。2005 年に現女将の阿部恭子さんが経営を引き継いだ息子は、この宿を経営する一家の第 18 代目となりました。

「この場所に最初に建てられた湯治小屋は、杉皮葺きの簡素な建物でした」と恭子さんは言います。

「人々は馬や牛で、自分の荷物や食べ物を持ってここにやってきました。そして、背の低いバラックのような建物の中で、地面に蓆を敷いて横になりました；寝るのもここでした。」と京子さん。地熱で温まった地面を利用して身体を温めるこの仕組みはオンドルと呼ばれます。オンドルは単に温かいだけではありません；噴気に含まれるミネラル成分が皮膚を通じて体内に吸収されます。

数世紀にわたって繁盛した蒸ノ湯は、1970 年代には本館に加えて 600 人以上のオンドル利用客を収容できる 16 棟の湯治小屋が立ち並ぶようになっており、多くの人々で賑わう様子から「蒸ノ湯銀座」と呼ばれるようになっていました。しかし、1973 年 5 月 12 日の早朝、土砂崩れによって、沢から離れた高台にあった旅館の建物を除くすべての建物が倒壊し、350 年の歴史が消え去りました。

「幸いなことに、震災が起きたのはゴールデンウィークの直後でした。お客さんも少なかつたし、けが人も出ませんでした」と当時 33 歳だった恭子さんは言います。「その後 10 年間は、どこの旅行代理店からもお客さんの紹介はありませんでした。60 人の従業員に対し、2 年間は給料を払い続けましたが、それをずっと続けることはできませんでした。結局、彼らに他の仕事を探すように言わざるを得ませんでした」

土地を整理して蒸ノ湯銀座を元の規模に戻すには 40 億円以上かかると言われ、恭子さんはその代わりに残された旅館を中心に様々なお風呂がある「お風呂のテーマパーク」を作ることになりました。恭子さんは、今でも昔の湯治場の雰囲気懐かしむそうです。「とても人間らしい環境でした。人々は声を掛け合っていました。昔ながらのお互いさまの精神でみんなが仲良くしていたのが、今の世の中にはなくなってしまいました」と恭子さんは言います。「日本の温泉文化は世界に類を見ないものです。私たちはそれを大切に、失わないようにしなくてはなりません」